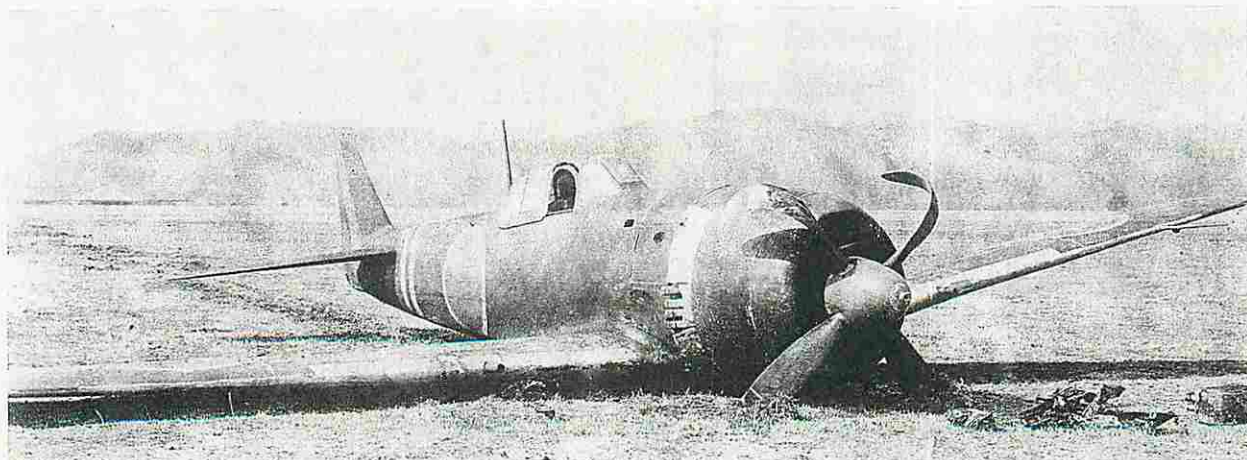


V 中 津 飛 行 場

— 正式名称「相模陸軍飛行場」 —



中津飛行場に胴体着陸した戦闘機「疾風」(昭和20年7月5日): 背後に鳶尾山から八菅山に続く稜線が見える。

1. 遺跡としての中津飛行場

遺跡として残る飛行場関係施設は以下のとおりである。まず「通信室」は、工業団地内の建設会社敷地内に現存し、室内は一部改造され物置となっているが、概観はほぼ当時のまま保存されている。大きさは10.5m×8.5mほどで、全高は5.18mある。構造は、鉄筋コンクリート造で、壁の厚さは30cm以上に及ぶ。窓には鉄板の扉が取り付けられるなど、堅固な造りとなっている。現在の地表面から1.36mの高さまでは下地が見えることから、かつてはこの周囲に土盛りがされていたものと見られる。

「正門」は現在、個人宅の門として現存している。大きさは71cm角のコンクリート造りで、全高は216cmある。中ほどには、表札をはめ込んだと見られる69cm×23cm、深さ4.2cmほどの切り込みが見られる。なお、この「正門」のみ、かつてあった場所から移設されている。

「通用門」も現在、個人宅の庭先に片側だけ現存している。「通用門」は「正門」にくらべるとやや小さめで、太さ59cm×56cmのコンクリート造りで、全高は184.5cmである。この門には、底辺が300cm、厚さ32cmの三角形のコンクリー

ト壁が付いているが、これは門の両側を土手にしていた際の土止めと見られる。

「格納庫基礎」も、片側のみではあるが個人宅の庭先に現存している。堅固なコンクリート造りで、扁平の台形をしていて、厚さは60.5cm、高さは350cmに及ぶ。かつては、この基礎を両端にすえ、上に屋根をかけて飛行機の格納庫とされていた。

「排水路橋」は、中津の県道相模原・大磯線の上に架かるもので、道路面から橋の下部までは4.17mほどの高さがある。橋の全長は15.75mに及び、高さは6mほどである。水路は現在でも通水があり、厚さ35cmのコンクリートで造られ、水路の幅は150cmあるが、橋の中央部でやや(28cm)狭まっている。

「弾薬庫」は、個人宅の物置に改装されたり、工場内の倉庫に使用され、3棟現存している。比較的状態の良いものにより実測図を作製したが、大きさは5.77m×4.8mほどで、高さは4.77m。厚さ17cmの鉄筋コンクリート製である。

なお、以上の遺跡の詳細に関しては巻頭カラーグラビアと10頁「愛川町の近代遺産位置図2」並びに巻末図版を参照されたい。

(浜田弘明)

2. 中津飛行場の歴史

飛行場ができる以前の中津台地は、一面の桑畑であった。「中津村」の地に陸軍の飛行場ができるとの通知がなされたのは、昭和15年2月頃のことである。陸軍省の資料『大日記 乙輯』第二類第一冊（防衛庁防衛研究所図書館所蔵）に収められた陸軍省公文書によると、用地買収が決定されたのは昭和15年2月16日、飛行場整備その他の工事実施決定が同8月9日、施設工事実施は10月11日決定となっている。愛川町内での聞き取り調査等によると、当地中津村での150町歩の用地買収が3月29日。その後、第二次として9月には70町歩の追加買収が行われている。この結果、中津村から依知村（厚木市）にまたがる一帯220町歩が飛行場用地となった。※

当時、農地を収公された上依知の住民森田晴雄氏は、その著書『百姓二題』（市民かわら版社）の中で次の様に思い出を語られている。

やがて上依知の農業に、大きな変化が起きた。上の原（今の工業団地）に陸軍の飛行場が作られることになったのである。

「印鑑を持って中津小学校に出頭せよ」という命令に等しい通知が、土地所有者に届いた。当日は泣く子も黙るといわれた憲兵が、周囲を見張る中で名前を呼ばれるままに、売渡し書に署名捺印させられた。

そして、「地上の桑や作物はすべて一ヶ月以内に運び出し、以後予定地内に立ち入ることは許さない。これに反する者は軍が処罰する」ということで、植えて間もない甘藷や里芋、種芋みの陸稲、ホーキモロコシ、そして桑などがどの家の庭にも山と積まれた。それでも収穫間近のホーキモロコシなどは、夜陰に紛れて収穫しに行った。

このようにして、昭和16年6月、熊谷陸軍飛行学校相模分教所が開校した。以後、中津台地の空を二枚羽根の練習機が舞うようになる。しかし、戦局の悪化にともない、昭和19年7月20日付けで飛行学校は閉鎖。その前後から、実用機、特に、戦闘機の基地となった。大戦末期の日本で

最も高性能な戦闘機といわれた四式戦闘機「疾風」（はやて）をはじめて装備した部隊もこの中津飛行場を根拠地とし、ここから戦地へ派遣されていた。また、「疾風」操縦者を育成する訓練基地ともなり、操縦者に最終段階の教育を施す錬成飛行隊もおかれた。そして飛行場の一番南側の格納庫には、陸軍士官学校の飛行班がいた。これは、士官学校の地上兵科の生徒たちに、戦場における航空機との協力の仕方を教えるための隊である。その他、飛行場でおこったことについては59頁『中津飛行場関係年表』を参照されたい。

戦後、すぐに飛行場用地の開墾が始まり、翌21年11月には約220町歩の開墾が完了している。22年5月5日には、旧飛行場の本部建物を校舎として、中津中学校が開校。そして、36年6月29日に神奈川県より内陸工業団地の構想案が提



中津中学校校舎（旧飛行場本部棟）

示され、41年4月23日に、その造成事業が完成した。内陸工業団地の敷地は、そのまま旧中津飛行場の範囲に相当している。現在、かつて飛行場のあった「中津村」は町村合併により「愛川町」となっている。このようにして中津台地は、桑畑から飛行場、さらには工業団地へと変遷したのであった。

※註：聞き取りでは用地買収等が、さらに1～2年早くから始まっていたのではないかとの説もある。

（山田勲、山口研一）

3. 飛行場の名称

陸軍省の資料『大日記 乙輯』第二類第一冊

(防衛庁防衛研究所図書館所蔵) 所収の公文書によると「相模陸軍飛行場」という名称で記されている。この飛行場には、各地から来た様々な部隊がいたが、使用していた名称に関する記憶は各人で異なる。22戦隊の操縦者脇森隆一郎氏の記憶では「相模飛行場」、加藤正一氏は、正式名称を「相模原飛行場」と記憶しているが、通常はただ単に「厚木」と呼んでいたという。また、同戦隊の整備班野口稔氏、近藤松男氏、及び第130野戦飛行場設定隊の中島茂氏は「中津飛行場」と記憶している。第一錬成飛行隊の古山正典氏は「相模原飛行場」、同隊の大森泰二氏の記憶では、村民が「中津飛行場」と呼んでいたことから、自分たち軍人も、その影響で何時しか、「相模飛行場」を「中津飛行場」と呼ぶようになったという。結局、正式名称は「相模飛行場」、通称は「中津飛行場」「相模原飛行場」等が混用されていたようだ。本稿では、軍人のみならず、村民の間でよく用いられていた「中津飛行場」を呼称として取り上げることとした。

4. 飛行場の施設概要

昭和19年4月20日に陸軍第一航空軍司令部でまとめられた『飛行場記録』(防衛庁防衛研究所図書館所蔵、42頁写真)によると、飛行場の大きさは南北1,800メートル、東西1,400メートル。中央に通路が記されている。この資料と10頁『愛川町の近代遺産位置図 2』を比較すると、現在の内陸工業団地の範囲が、そのまま飛行場の外郭線であることが分かる。また、終戦直後に復員局で編纂された『陸軍飛行場要覧』(防衛庁防衛研究所図書館所蔵)によると、人員の「収容施設」は1,300名分。航空機の「格納施設」としては「掩体 大30ヶ所 小30ヶ所」と記されている。ただし、この資料は戦後の混乱期の中で、製作されたものだけに、数字は関係者等の記憶を基にした概数の記録と考えておいたほうがよからう。なお、今回の調査で判明した結果を41頁の『中津飛行場施設配置図』にまとめた。

5. 飛行場にいた部隊

(1) 熊谷陸軍飛行学校相模分教所

陸軍の熊谷飛行学校は、飛行兵の増員とともに分教所を各地に求めた。館林・新田(以上群馬県)・下館(茨城県)・甲府(山梨県)などである。中津の飛行場は、昭和16年6月、熊谷陸軍飛行学校相模分教所として出発した。しかし、戦局の悪化に伴い昭和19年7月20日付けで飛行学校は閉鎖された。

(2) 飛行第22戦隊

四式戦闘機「疾風」をはじめて装備した部隊として、熟練した操縦者と整備員を集めて編成された。福生(東京都福生市)の陸軍航空審査部で編成が始まり、中津飛行場に移動してきたのは昭和19年3月25日から4月10日の間のことらしい。中津で最終的な訓練の後、8月21日、中国戦線に向けて出発。10月4日(或いは2日)、戦力回復のため、中津飛行場に帰還。再度訓練の後、同月22日(或いは20日、21日)にフィリピンに進出のため、中津を出発。同地で激戦に参加し、多くの将兵が戦死した。戦力回復のため、再度中津に帰還。これは昭和20年1月下旬のことである。ただし、この帰還時、フィリピン各地に数多くの整備兵が残った。彼らの多くは戦死し、生存者も終戦まで、苦闘を続けることとなる。一方、帰還した将兵たちは、本土に対する米軍機の空襲を避け、訓練を朝鮮で行うこととなった。3月3日には、中津を出発、終戦もその地で迎えた。ちなみに、当初隊が編成された時の操縦者40名のうち、無事終戦を迎えたのは、わずか4名であるという。なお、22戦隊の事績を記すに際しては、関係者からの聞き取りの他、『飛行第二十二戦隊部隊史—疾風と共に—』(飛行第二十二戦隊部隊史編集委員会編、二二飛会発行、昭和60年)を参考にした。

(3) 飛行第72戦隊

昭和19年5月16日、「疾風」装備の戦闘機隊として三重県北伊勢飛行場にて編成された。操縦者

V 中津飛行場

の主力は特別操縦見習士官（特操）1期生及び少年飛行兵出身者であった。10月31日中津飛行場に移動し、12月2日までこの地で訓練を行い、フィリピン戦線へ出発した。その後、同戦線で操縦者、整備兵のほとんどが戦死し、中津飛行場に残っていた留守部隊は昭和20年5月に解隊した（「飛行第72戦隊略歴」等、比翔会『飛行第七十二戦隊隊員名簿』所収）。なお、当初42名いた操縦者の内、無事内地に帰還できたのは、わずか5名であるという。

（4）第一錬成飛行隊

昭和19年3月下旬から、中津飛行場で編成が始まった部隊。操縦者に対する訓練の最終教程を施すために設けられた部隊である。特別操縦見習士官や少年飛行兵出身の操縦者に戦闘機「疾風」の訓練を行った。また、この隊の教官・助教は本土防空戦闘にも参加している。一錬飛（第一錬成飛行隊の略称）は、終戦まで一貫して、この中津飛行場を根拠地としていた。なお、この隊の事績に関しては、渡辺洋二「第一錬成飛行隊の活動―教え、戦った4式戦部隊―」（『航空情報』平成2年9月号）に詳しい。

（5）陸軍士官学校飛行班

昭和16年7月26日に、陸軍士官学校地上兵科の生徒たちに対する空地一体作戦訓練のため設立された。中津飛行場の一番南側、No.5の格納庫を独占的に使用していた。

（6）第130野戦飛行場設定隊

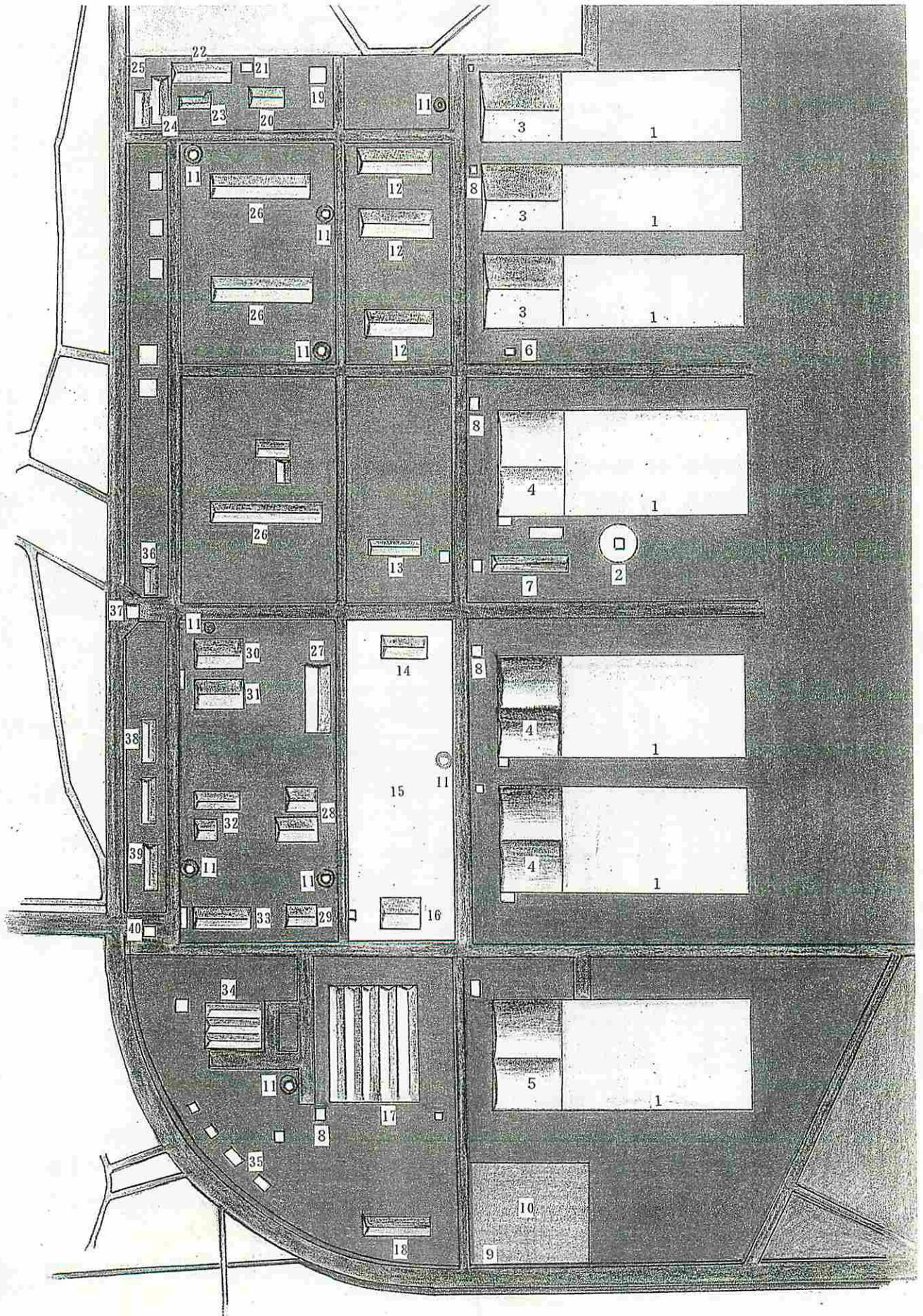
戦争末期、昭和20年6月から、駐留した部隊。主に北海道出身の兵で構成されていた。建設用重機を保持し、飛行場に関係する様々な土木工事・建設工事を任務とした。この隊は、中津小学校を宿舎としている。なお、当時、同隊に所属していた中島茂氏『私の昭和漫訪記』（新読書社、平成12年）の中に中津飛行場に関する記述がある。

中津飛行場施設配置図解説

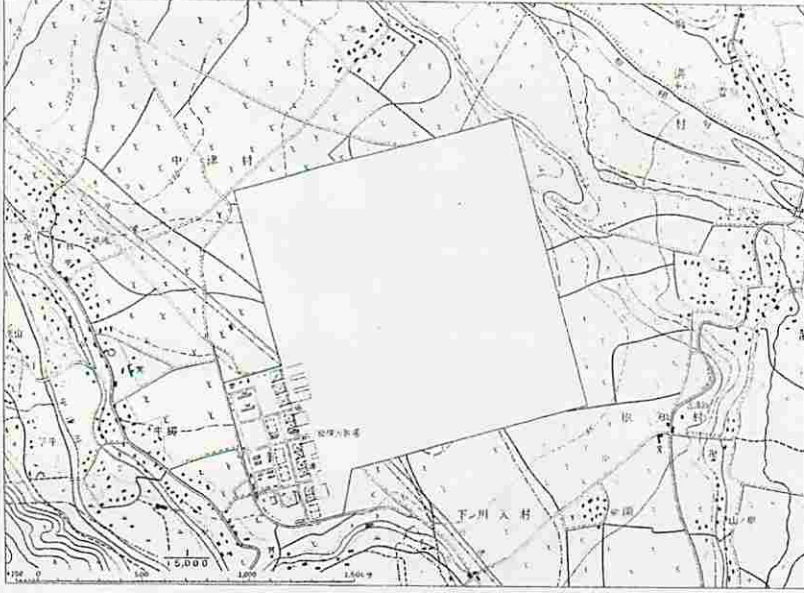
No.	軍事施設名
1	準備線（ペトン）
2	通信室
3	格納庫（大型）
4	格納庫（二つ屋根型）
5	陸軍士官学校飛行班格納庫
6	ポンプ設備
7	本部棟
8	貯水槽
9	土塁
10	ドラム缶集積所
11	防火用貯水池
12	兵舎（少年飛行兵）
13	倉庫？
14	倉庫
15	練兵場
16	機械工場
17	飛行機工場（機体修理工場）
18	燃料庫
19	医務室
20	酒保
21	高架水槽
22	浴場
23	糧秣倉庫
24	炊事棟
25	井戸
26	兵舎
27	車庫（給油車・起動車用車庫）
28	落下傘格納庫
29	電精器工場・庶務班事務室
30	集会所
31	食堂
32	気象班事務所
33	休憩所（材料廠工員用）
34	発動機工場
35	弾薬庫
36	守衛所
37	正門・通用門
38	倉庫
39	駐輪場
40	門「立川の門」

※右図は小川充・山田勲作成の原図に加筆し上出芳恵が作成した。10頁『愛川町の近代遺産位置図 2』（中津飛行場関係遺構位置図）の青色の範囲が本図に相当する。

中津飛行場施設配置図



2. 飛行場の範囲と遺跡位置

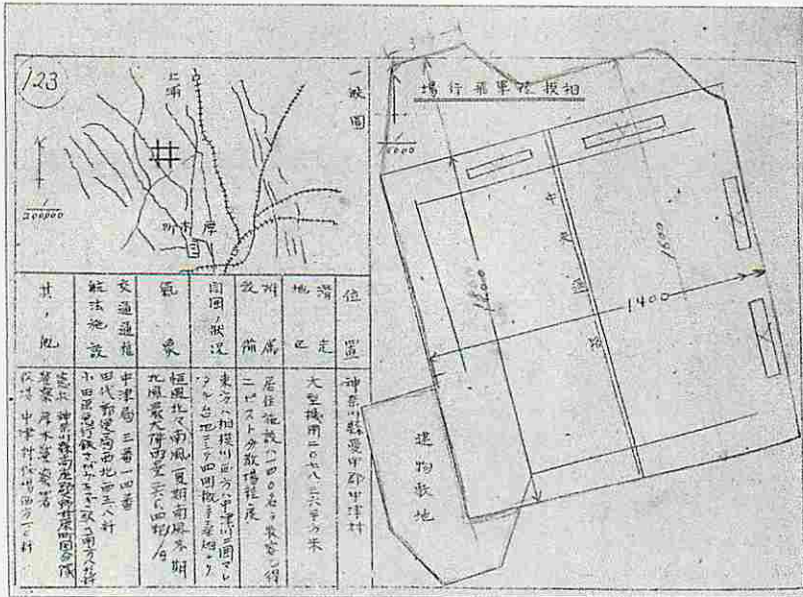


相模陸軍飛行場の当初の形態

海軍水路部が陸軍飛行場の概況をまとめた「陸軍航空基地資料」中に昭和18年以前の相模陸軍飛行場の図面があります。この図面に続いて記された概要説明に「昭和18年4月調」と記されています。従って、これ以前に陸軍側から提供された資料に基づいて作成されたものと思われます。当初の飛行場は、このように正方形に近いものであったことが分かります。用地は昭和15年2月時点の形態。

防衛研究所戦史研究センター所蔵

防衛研究所戦史研究センター所蔵



相模陸軍飛行場の最終的な形態

陸軍が、昭和19年段階の飛行場の状況をまとめたガリバン刷りの資料「飛行場記録」です。印刷で相模陸軍飛行場の当初の正方形に近い形態が記されていますが、その上から朱書きで訂正が入り、拡張された後の最終的な外郭線が記されています。これは現在の内陸工業団地外周道路の形態と一致します。用地は昭和15年9月以降の形態。

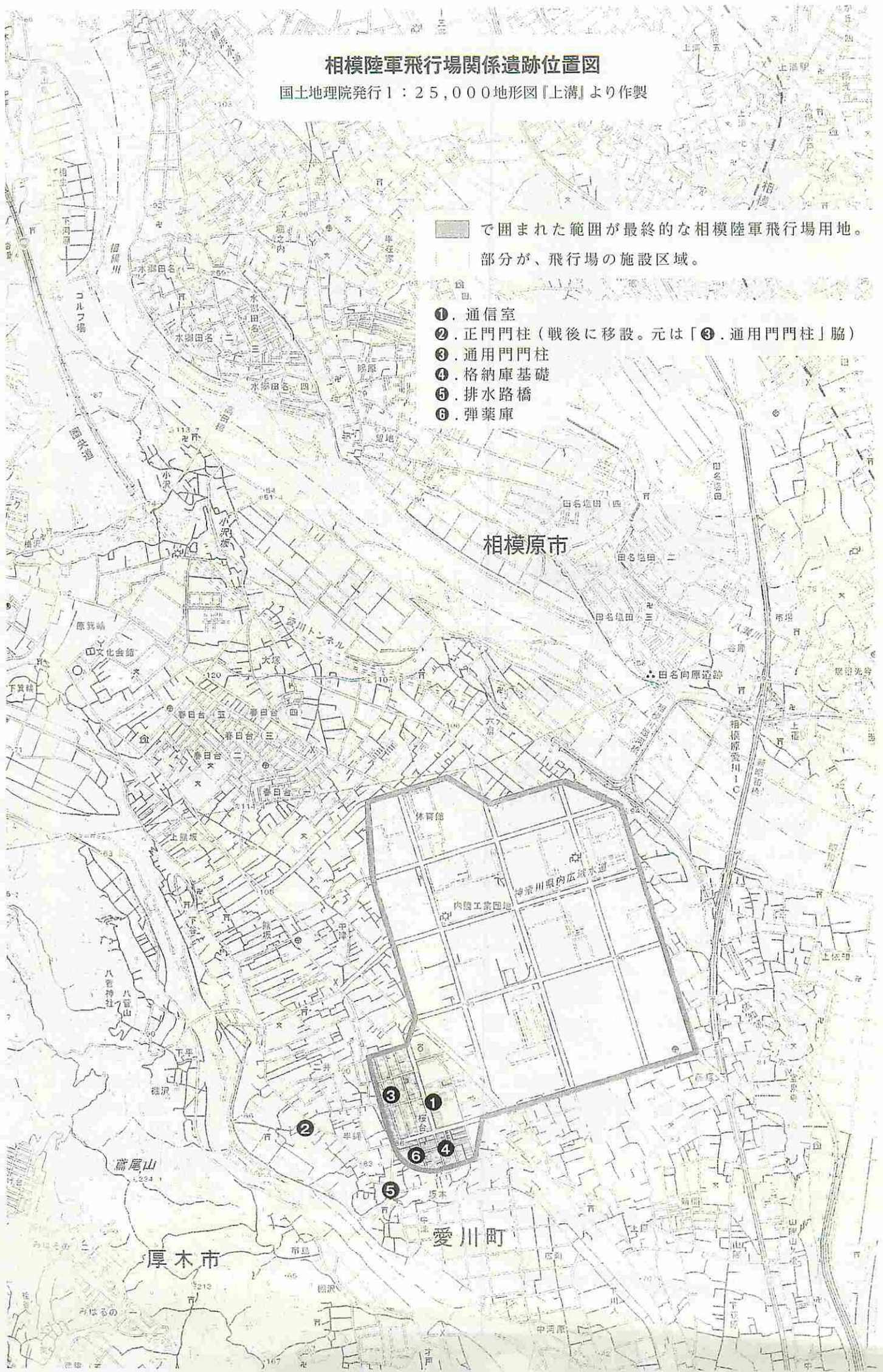
防衛研究所戦史研究センター所蔵

相模陸軍飛行場関係遺跡位置図

国土地理院発行 1 : 25,000 地形図「上溝」より作製

で囲まれた範囲が最終的な相模陸軍飛行場用地。
部分が、飛行場の施設区域。

- ①. 通信室
- ②. 正門門柱（戦後に移設。元は「③. 通用門門柱」脇）
- ③. 通用門門柱
- ④. 格納庫基礎
- ⑤. 排水路橋
- ⑥. 弾薬庫

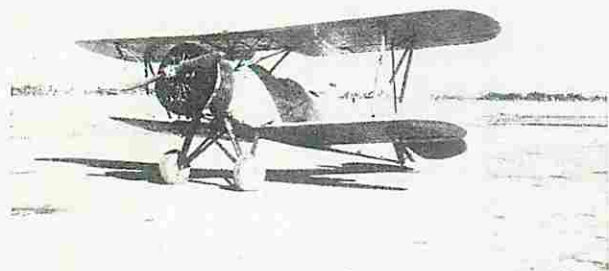


(7) その他の部隊

飛行場の警備や炊事を担当する部隊として第58飛行場大隊。飛行場を整備する部隊として第4独立整備隊がいた。

6. 飛行場の航空機

飛行学校当時（昭和16年から19年7月20日）は、通称「赤トンボ」と呼ばれた九五式中間練習機であった。中津地区のみならず愛川町内で当時



九五式中間練習機「赤トンボ」。ただし本写真は中津飛行場ではなく、熊谷飛行学校本校のもの。

のを知る住民に聞き取り調査を行うと、圧倒的にこの「赤トンボ」の話が多い。最初に飛んできた飛行機だけに、黄色に塗装された複葉機の印象は強烈であったようだ。飛行学校閉鎖後にもっとも多く翼を連ねていたのは、「疾風」(37頁写真)である。22戦隊、72戦隊といった戦闘機隊や第一錬成飛行隊が使用した機体である。塗装はグリーンや斑模様のもの、銀色の金属色のままのもの等、部隊によって、様々であったようだ。なお終戦まで、この地に展開していた第一錬成飛行隊は、訓練を行う部隊であるだけに、「疾風」以外に様々な航空機をもっていた。九七式戦闘機、一式戦闘機「隼」、一式双発高等練習機などである。また、陸軍士官学校飛行班は、九八式直協、九八式軽爆撃機、九九式軍偵察機を保有していた。

(以上、山口研一)

7. 聞き取り調査の記録

(1) 中津在住 熊坂庚二氏の話

略歴：大正9年生。愛川町中津在住。

飛行場になる前の作付けは、夏にサツマイモ・籐モロコシ・陸稲・桑、冬は大麦・小麦等が主で、自家用にその他色々栽培していました。特に桑の葉を使用した養蚕は盛んで、年3回、春蚕・秋蚕・晩秋蚕の飼育をする養蚕農家が多く、農家随一の収入源でした。

飛行場に農地が収公された当時は、川崎にいたのでわかりませんが、戦後中津に戻り、払い下げを受けた時の価格は1反200円でした。これは買い上げ時と同じ価格と聞いています。また戦後、二井坂の四軒で格納庫の米松を共同で払い下げしてもらい燃料にしました。

(山田勲)

(2) 府中刑務所相模作業所勤務 杉山秋三氏の話

略歴：大正11年、中津で生れる。昭和15年4月から17年9月まで、府中刑務所相模作業所に勤務し、中津飛行場建設に従事。同年10月召集で中津を離れる。

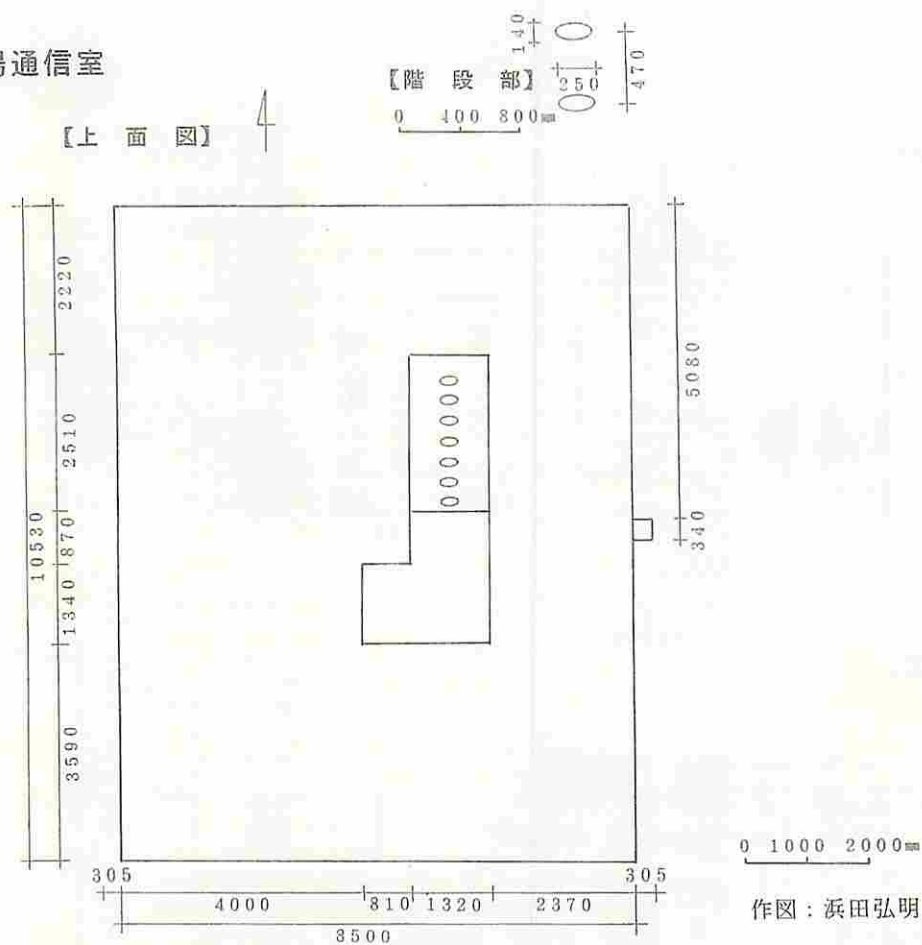
【飛行場の建設】

この辺りの農家の人は皆、飛行場建設工事に従事していました。昭和13年くらいから、飛行場の工事が始まったと記憶しています。府中刑務所の囚人も使っていました。私は同刑務所に会計係として勤務していました。飛行場の一番北の炊事棟（現、朝倉自動車）の辺りに囚人棟がありました。200人から300人くらいが働いていたと思います。

昭和17年10月に召集され、中津を離れました。帰ってきたのは終戦後です。戦後飛行場跡地は一時農地になりました。一部、草競馬を行う馬場にした所もありました。昭和22年か23年頃のことと思います。

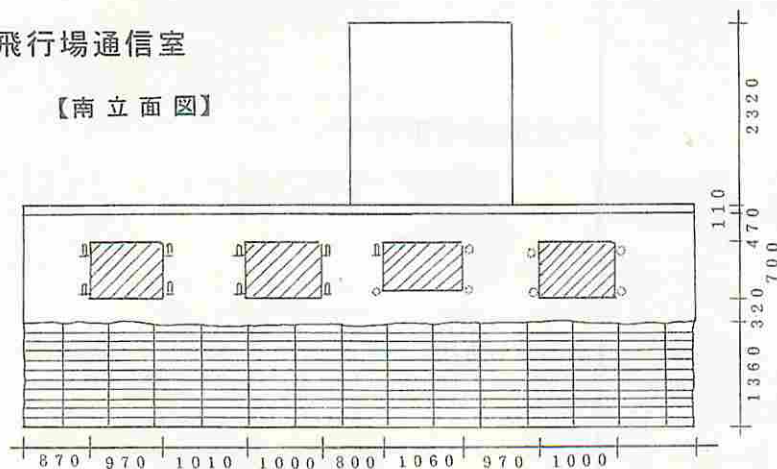
中津飛行場通信室

【上面図】

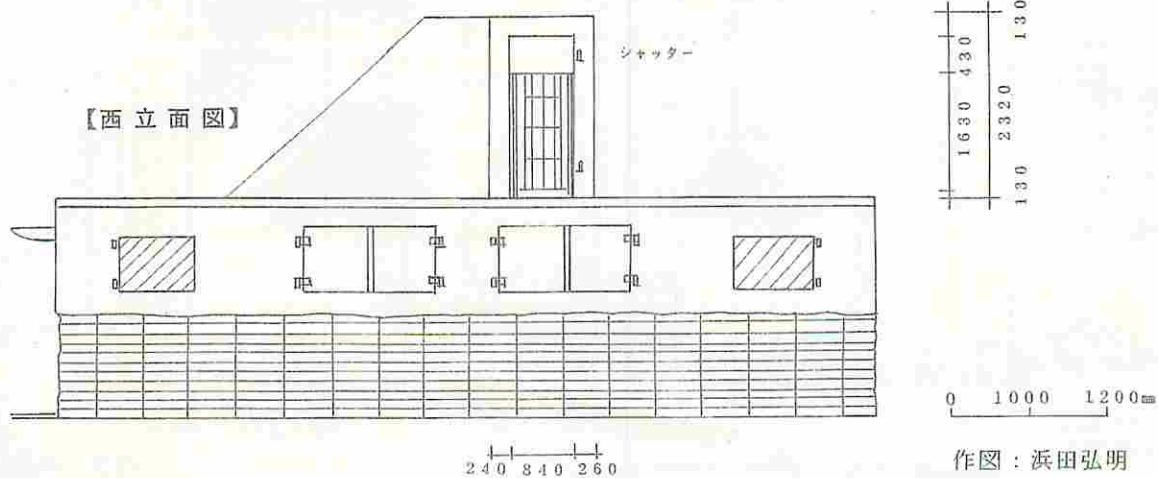


中津飛行場通信室

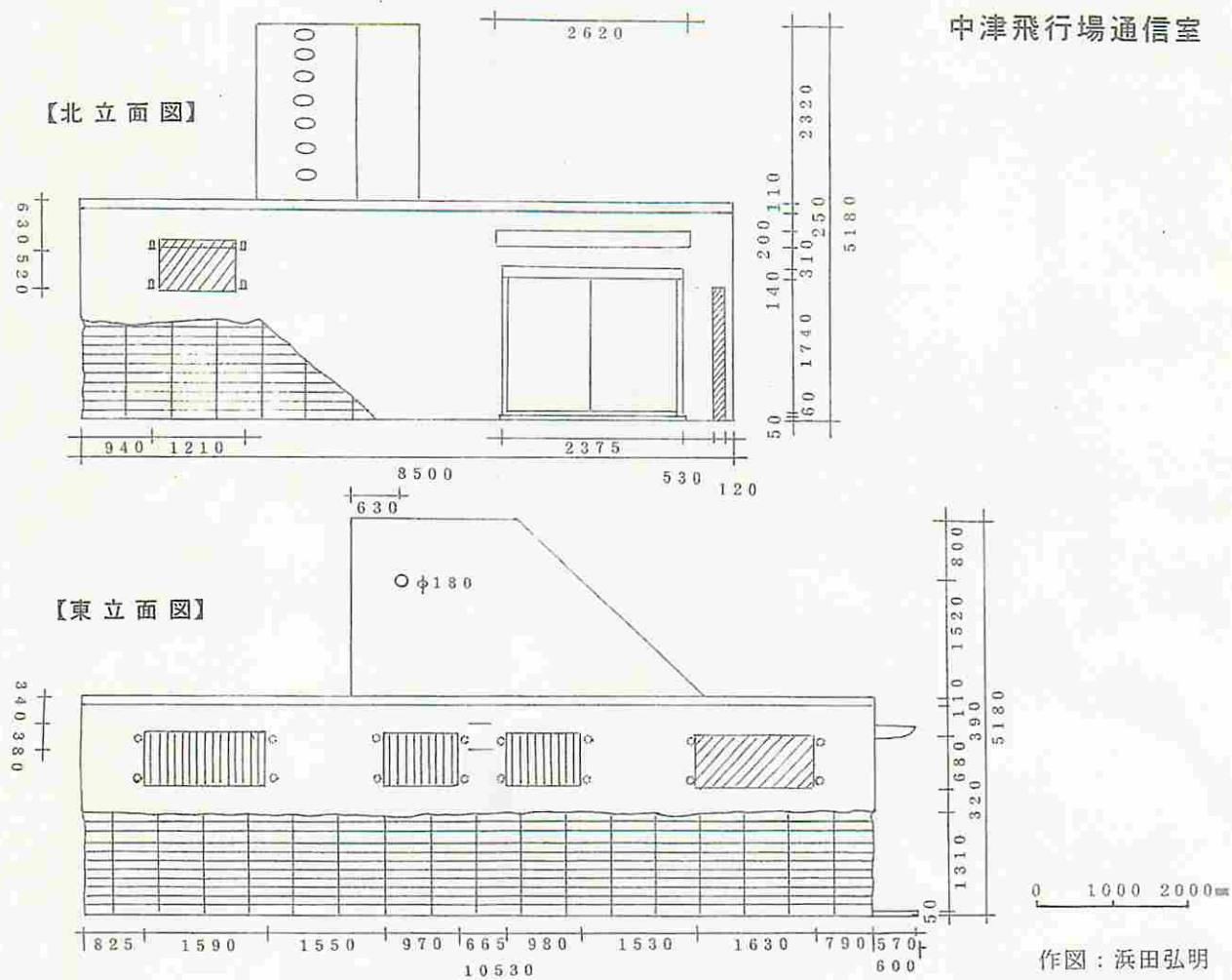
【南立面図】



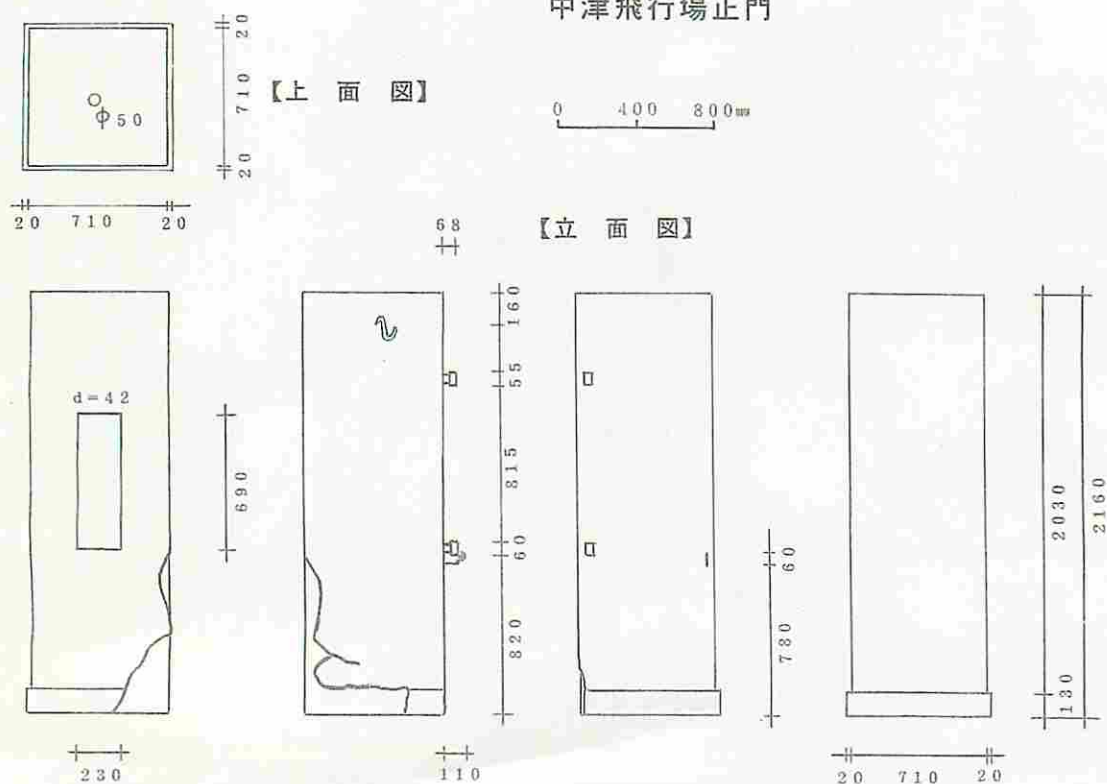
【西立面図】



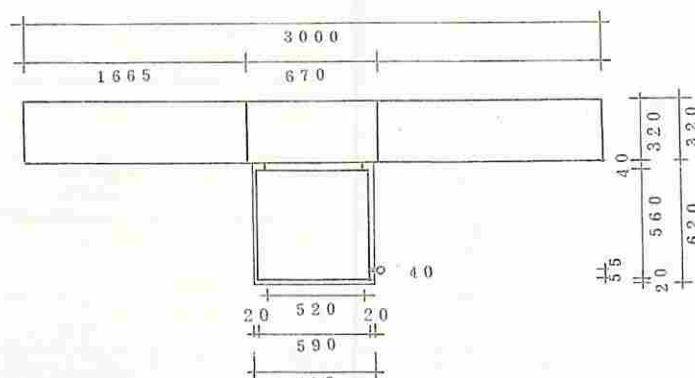
中津飛行場通信室



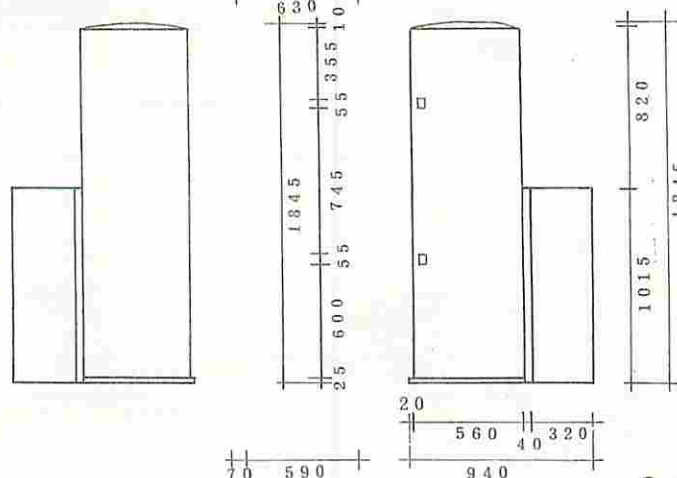
中津飛行場正門



【上面図】



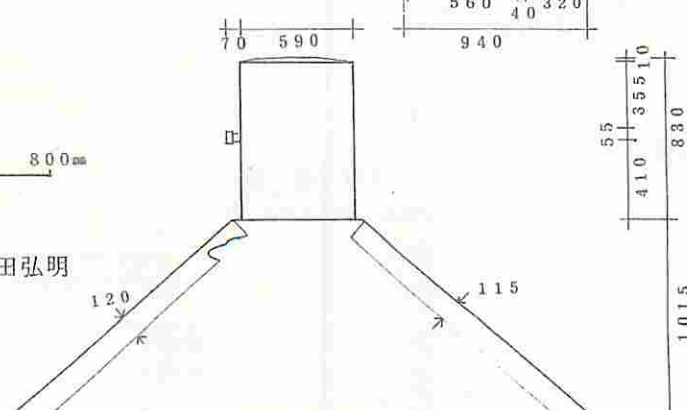
【立面图】



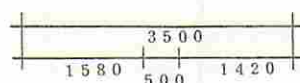
中津飛行場通用門



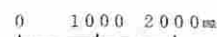
作図：浜田弘明



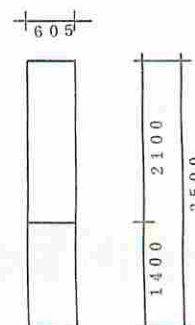
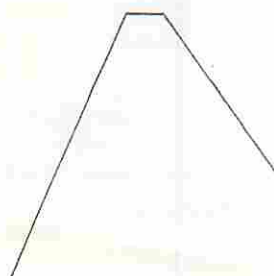
中津飛行場格納庫基礎



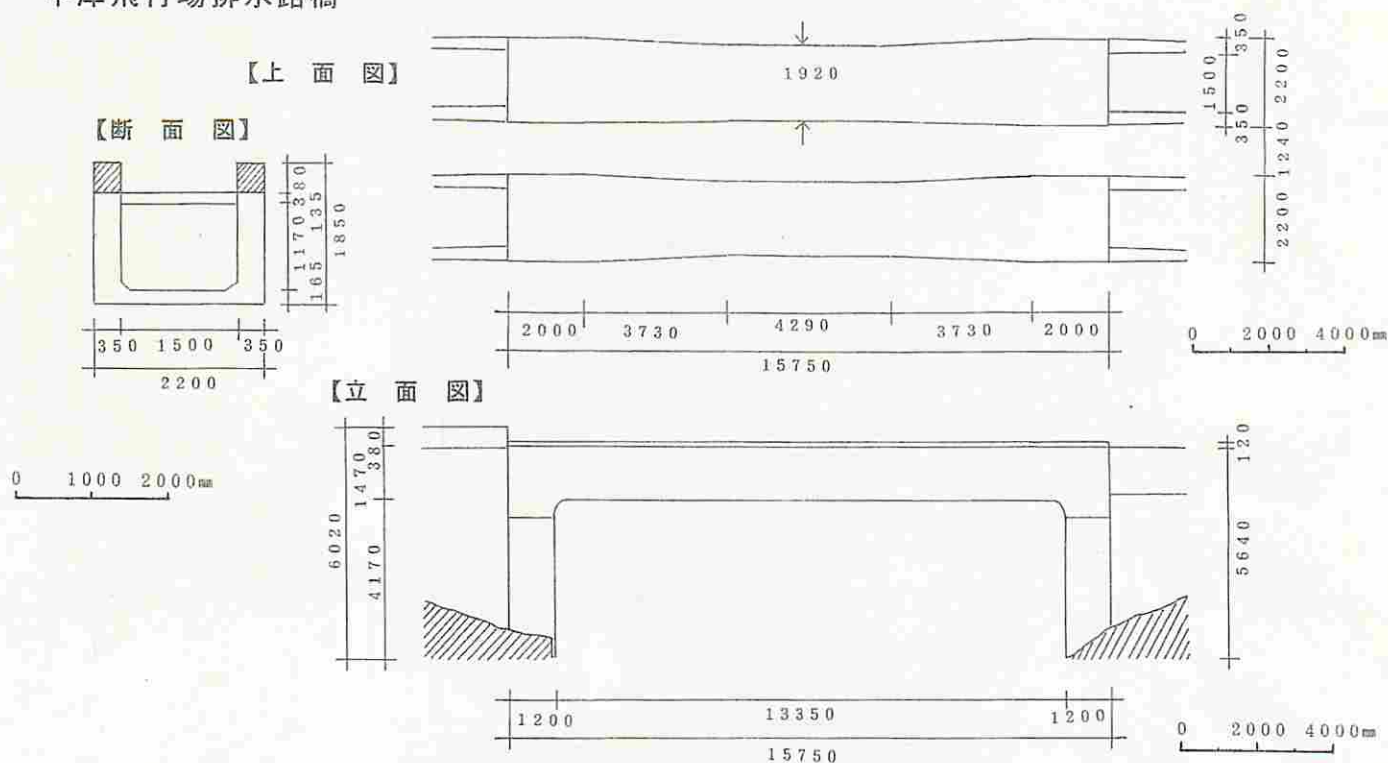
【上面図】



【立面图】

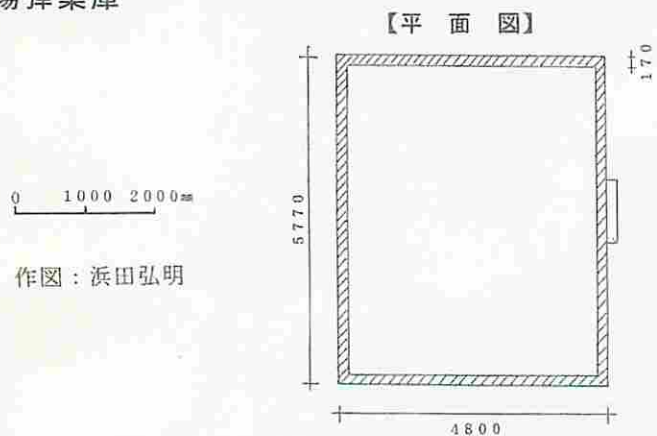


中津飛行場排水路橋

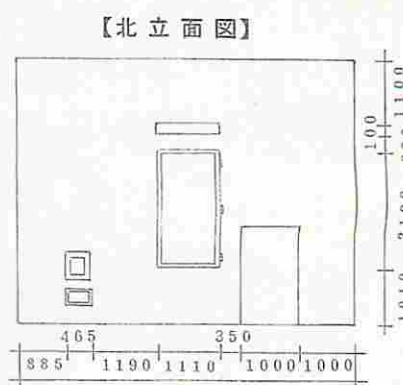
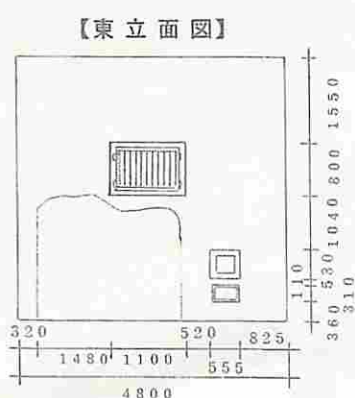
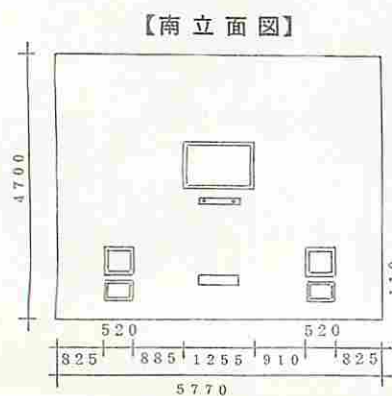


作図：浜田弘明

中津飛行場弾薬庫



作図：浜田弘明



中津飛行場関係年表

年 月 日	事 項	出 典 等
昭和15年 2月16日	陸軍省、中津村内の飛行場用地買収を決定	『大日記 乙輯』
昭和15年 3月29日	中津村、村内地所(150町歩)を陸軍省に売り渡し決定	『(中津村)村会会議録議決書』
昭和15年 6月	この頃までに、桑の木の伐採を完了し、離作	『二十年の歩み』
昭和15年 9月	上六倉・吹上・神明前等70町歩を追加買収	『二十年の歩み』
昭和16年 6月	熊谷陸軍飛行学校相模分教所開校	『二十年の歩み』
昭和16年 7月26日	中津飛行場に陸軍士官学校飛行班発足	「陸士飛行班」
昭和18年	この年、飛行場用地更に50町歩追加	『愛川町史年表(試稿)』
昭和19年 3月25日	22戦隊福生飛行場より移駐	『22戦隊史』
昭和19年 7月20日	熊谷陸軍飛行学校相模分教所閉校	「第一錬成飛行隊の活動」
昭和19年 7月22日	第一錬成飛行隊編成完結	「第一錬成飛行隊の活動」
昭和19年 8月21日	22戦隊中国戦線に向けて中津を出発	『22戦隊史』
昭和19年10月 4日	22戦隊中国戦線より中津飛行場へ帰還	『22戦隊史』
昭和19年10月22日	22戦隊比島進出のため中津飛行場出発	『22戦隊史』
昭和19年10月31日	72戦隊大阪伊丹飛行場より飛来	「飛行第72戦隊略歴」
昭和19年12月 2日	72戦隊比島進出のため中津飛行場を出発	「飛行第72戦隊略歴」
昭和20年 1月下旬	22戦隊比島より中津へ帰還	『22戦隊史』
昭和20年 2月17日	午前9時過ぎ、米軍機グラマン中津飛行場を初空襲	『家戸日記』
昭和20年 3月 3日	22戦隊中津を出発し、朝鮮へ移動	『渡辺日記』
昭和20年 3月11日	米軍機グラマン中津飛行場を空襲	『大川周明日記』
昭和20年 5月17日	正午過ぎ、米軍機P51ムスタング中津飛行場を空襲	『家戸日記』『大川周明日記』
昭和20年 7月10日	米軍艦載機、中津、田代を空襲。機銃掃射により死者あり。平山橋欄干に弾痕を残す	『家戸日記』『大川周明日記』
昭和20年 7月30日	午前・午後の両度にわたり米軍艦載機中津飛行場を空襲。送信所、その他、飛行場建物にロケット弾投下	『大川周明日記』
昭和20年 8月 6日	米軍機P51ムスタング中津飛行場を空襲	『大川周明日記』
昭和20年 8月15日	終戦	
昭和21年11月	旧飛行場用地約220町歩の開墾完了	
昭和22年 5月 5日	旧飛行場本部建物を校舎にして、中津中学校開校	『愛川町史年表(試稿)』
昭和22年 6月	中津村に赤痢流行。9月まで旧飛行場建物を臨時病棟とす	『愛川町史年表(試稿)』
昭和36年 6月29日	県より旧飛行場跡地に内陸工業団地開発の構想案提示	『愛川町郷土誌』
昭和41年 4月23日	内陸工業団地造成事業完成	『愛川町史年表(試稿)』

※『愛川町郷土誌』、『愛川町史年表(試稿)』、陸軍省『大日記 乙輯』(防衛庁防衛研究所図書館所蔵)、昭和15年『(中津村)村会会議録議決書』、『二十年のあゆみ』(内陸工業団地協同組合)、『大川周明日記』、『飛行第二十二戦隊部隊史—疾風と共に—』(『22戦隊史』と略記)、飛行第二十二戦隊員渡辺三郎氏の日記(『渡辺日記』と略記、前記『22戦隊史』所収)、「飛行第72戦隊略歴」(『飛行第七十二戦隊隊員名簿』所収)、第一錬成飛行隊員家戸久信氏の日記(『家戸日記』と略記)、「陸士飛行班」『元陸軍士官学校飛行班友の会会員住所録』所収)、渡辺洋二著「第一錬成飛行隊の活動—教え、戦った4式戦部隊—」(『航空情報』平成2年9月号掲載、「第一錬成飛行隊の活動」と略記)及び聞き取り調査により作成。出典の項には、一番主なものを記した。また、日付等について幾説がある場合は、関係者の証言が多かった説でとった。聞き取り調査等のみに拠ったものは特に記さなかった。

執 筆 分 担

序章 浜田弘明

I 章 大矢善久・浜田弘明・山口勇一・山口研一

II 章 浜田弘明・山口研一

III 章 小島秀也・浜田弘明・山口研一

IV 章 山口勇一・浜田弘明

V 章 山田勲・大矢善久・浜田弘明・山口研一

第3刷あとがき

平成13年の第1刷発行以来、11年が経過しました。しかし、第3刷に際しても、発刊時の情報を基本とし、誤字・脱字等の訂正必須箇所以外は、手を加えておりません。なお、内容に関しての御意見・お問い合わせは、愛川町郷土資料館（TEL 046-280-1050）にお願い申し上げます。

（教育委員会スポーツ・文化振興課）

愛川町文化財調査報告書第22集

愛川町の近代遺産

2001年3月30日 第1刷発行

2012年7月10日 第3刷発行

編集 愛川町近代遺跡・資料調査会

愛川町教育委員会

発行 愛川町教育委員会

〒243-0392 神奈川県愛甲郡愛川町角田251-1

TEL 046-285-2111（代表）

印刷 栄文舎